

# 論文要旨

## 序章 本書のねらい

『古事記』や『日本書紀』など上代散文における神話群は、「記紀神話」とか「日本神話」などと呼ばれ一括りに論じられてきた経緯がある。現在では従来の「記紀神話」研究を批判的に活かしつつ、より厳密な神話研究に移行したといえる。つまり『古事記』と『日本書紀』を切り離し、『古事記』として個別に取り扱われるべきとする立場をとることで、『古事記』という文献そのものが研究対象として扱われるようになった。『古事記』はそれ自体で完成した一個の作品として捉えられ、用字用語の特徴や、記載する神話の構成や構造の特質が論じられ、『古事記』の独自性が明らかにされてきた。

本書はこのような作品論的立場から『古事記』の世界がもつ独自の構造を明らかにし、そのような構造体を作り上げた『古事記』編纂者の構想を考察する。

『古事記』では神々が活動する空間として「高天原」「黄泉国」「葦原中国」「夜之食国」「海原」「常世国」「根之堅州国」の七つの世界が設定されている。また天皇の事蹟を語る中巻以降、人間が暮らし天皇が統治する空間は「天下」という表記を以て示される。本書では構造、即ちこれらの世界のつながりを考察するにあたり、第一章では神話的世界を結びつける存在として、移動する神とその移動表現に着目し考察を試みた。また天皇世界である「天下」は「葦原中国」が変化する世界であり、第二章、第三章は中巻以降も変化を続ける「天下」について考察を進めた。

## 第一章 『古事記』上巻における世界と神話

第一章では『古事記』上巻に語られる神々の世界の分析を進めた。

序節は神話的世界の構造を示すために総論的に述べたものである。先ず世界間を行き来する総ての神々の移動形態を抽出し分類を試みた。その結果、神々の移動は概ね以下の三種類に分類できると考えた。

- A 上位者の命令に基づく移動
- B 自らの意志に基づく移動
- C 経緯を記さない移動

ここで得られたA B Cの総論的分類をもう一度各論に落とし込み、『古事記』が描く神話的世界の構造と構想とを考察したのが、第一章の各節である。これらの神話における移動形態の分析から導き出された世界同士の関係性は、

- A — 組織的な往来により示される秩序立った関係性、境界が明確、閉鎖的、遠ざかる世界
- B C — 自由な往来を許容する関係性、境界が曖昧、開放的、近い世界

と分析された。AとB Cにおいて、矛盾、或いは対立する関係が示されているが、『古事記』編纂者はこの相反する関係性を段階的に、或いは並行して用いることで、固定的な構造ではなく、物語に応じて変化する可変的な世界として描き出していると推定し、各節ではこの分類を基に神話を個別に分析した。

### 第一節

伊邪那岐命の移動は、「高天原」「葦原中国」「黄泉国」に及び、AとBの移動形態が用いられる。これを以て『古事記』は、冒頭でまず神話的世界ごとに関係性が異なることを示し、画一的な世界ではないことを表していると考えた。

### 第二節

須佐之男命の「葦原中国」に始まり「高天原」「根之堅州国」に到る移動は、BとCの移動形態によっ

て語られている。このような須佐之男命の移動は、自由で開放的な世界において可能なものである。須佐之男命の自発的な世界間移動は、世界と世界の間がまだ互いに近しく、境界もはっきりとしていない未熟な状態、即ち初期段階の世界を具現していると推定した。

### 第三節

建御雷神は、秩序的移動のAと自発的移動のCという二種類の移動形態を見せる神であり、これらを体現する神として特殊である。この違いを変化と捉え、「高天原」と「葦原中国」とが自由な往来を許容する関係から、王権により秩序立てられた関係へと変化したものと考えた。また中巻においては、夢による移動という現実的世界と神話的世界との新しい関係が語られており、これも建御雷神によって表現された世界構造であることを論じた。

### 第四節

猿田毘古神と天宇受売命の神話は、天孫降臨、つまり「高天原」から「葦原中国」への移動に伴い、神に仕える存在の「天宇受売命」を、天皇に仕える存在の「猿女君」に変化させる物語として解釈した。この変化は中巻以降天皇が治める世界「天下」を見据えた変化である。だからこそ神話的世界である「葦原中国」が、現実的世界である「天下」へと変化する直前のこの場所に配置されているとした。

## 第二章 神話的世界の変遷と「天下」の形成

第二章では天皇の統治世界である「天下」の形成を中心に考察を進めた。人間の世界を語るにあたり神話的世界との断絶や神話性の払拭といった作業が必要であり、神話から現実への転換点では特に高度で慎重な配慮が求められたことが推定される。この点『日本書紀』は、神話的世界を「離れていく世界」と描くことで対応している。

一方『古事記』では、『日本書紀』とは対照的に中巻以降にも神話的世界と「天下」とが明確で強固なつながりをもって描かれており、これは『古事記』特有の構造といえる。この構造を利用し神話的な保証を得ることで「天下」は拡大し変化し続ける世界として存在していると考えた。

このように捉えられる神話的世界との関わりの中で「天下」が如何に語られ、形作られていくのか。それを明らかにするのが第二章の目的である。

### 第一節

神話的世界「海原」について考察した。この「海原」は中巻以降も天皇の支配領域にはならず、その権威の及ばない領域として描かれる。これは『古事記』が独自に設定した「海原」の性質であるが、第一節(一)では『古事記』中の海に関する物語を検証し、この性質を確認した。また(二)ではこの「海原」の性質を利用して「景行記」弟橘比売命入水の物語が組み立てられていることを考察した。

### 第二節

「天下」の変化が天皇と後の物語によって語られていることを「垂仁記」を題材に考察した。(一)では物語構造の要に支配機関としての拡充を語る部曲記事があることを指摘し、(二)では「天下」の充実が垂仁天皇の成長によって語られていることを考察した。

### 第三節

天皇の支配領域がいよいよ海を越える「仲哀記」に注目した。ここでは「天下」の拡大が神託の言葉によって約束され、実現している。(一)では神託に示される「茲天下」「此国」、(二)では「西方有国」の解釈から新たな「天下」の創出に、神話の力を利用していることを考察した。(三)では特に『書紀』との比較から「仲哀記」の託宣では潔斎された場が重視されている点を踏まえ、これが人の世における「神話的世界の再現」であること指摘した。「仲哀記」で「天下」は託宣によって神話的世界とつながり、こ

の神話的に保証された語りの中で支配領域の拡大という変化が語られるのであった。

#### 第四節

『古事記』が応神天皇を象徴的な「始祖」として扱っていることを、伊奢沙和気大神と名を易える物語の分析から指摘した。ここでは夢が媒介となって神話的世界と「天下」が結び付けられており、応神天皇の御名にまつわる神聖性が強められることになっている。後世に「始祖」として評される一因がここにあると考えた。

### 第三章 変化する「天下」

第三章でも変化する「天下」という観点から各天皇記の分析を試みた。その結果、「天下」は『古事記』の語りの現在、即ち現実世界に近づくように変化していることがわかった。

#### 第一節

八田若郎女をめぐる物語の考察から、仁徳天皇と皇后石之日売命が両輪となり「天下」を運営していく様子が語られることを明らかにした。これは現実世界の政における職掌が物語に反映しているのであり、『古事記』の「天下」が、現実世界の統治領域である天下に近づく形で変化しているものと考えた。

#### 第二節

安康天皇が「邪心」を抱く目弱王に殺害される物語を取り上げた。「邪心」は『古事記』において在位中の天皇に対する個人的な叛意を表す語であることを分析した。そして『書紀』との比較から『古事記』は系譜と物語に独自の改変を加えて、目弱王を「邪心」ある人物として描き出していることを考察した。下巻の「天下」が現実性を強めつつ変化していく中で、「安康記」は天皇の不可侵性を説くために敢えて逆説的に天皇弑逆の物語を載録したと考えた。

### 終章 神話的世界から現実的世界「天下」へのまなざし

序章から第三章までを概括した上で、神話から始めて現実を語ることの意義と問題点について述べた。

天皇が古代日本を統治する根拠、それは天皇が天皇という立場にいることの意味、と言い換えることができる。この天皇の権限を保証するのが『古事記』や『書紀』に編纂改変されて記載された神話である。神話から書き始めるのは、天皇が天つ神の血脈に列なる存在であることを示すためである。これが絶対性と神聖性の保証となるのであり、つまりは天皇であることの説明になるのである。

これとは別に天皇の権限を保証する方法が新たに導入される。それが律令制度である。これは法と秩序に基づく国家運営の方法であり、その体制の頂点に天皇が置かれるのである。問題となるのは神話的保証と律令的保証とが相反する性質にあることである。これは神話によって示される神聖性は、律令によっては説明ができず、律令的な保証もまた神話に求めることができないといった相性の悪さに起因する。

この「秩序化」と「神聖性」という二律背反の構造が、『古事記』の世界構造と重なるものと考えられる。要点のみを整理し以下に示すと、

混沌から秩序化されていく世界構造—律令的—離れていく世界観 【分類A】

自由な往来を許容する世界構造——神話的—つながったままの世界観 【分類B】 【分類C】

となり、『古事記』はこの矛盾ともいえる構造を内包し、並行して描き出すことに成功しているといえる。このような文献が七世紀後半から八世紀初頭の日本においてどのように位置づけられるのか、という時代への定位が次の課題となるが、本書では終章で触れるにとどめ、今後の方向性と課題として示し、まとめとした。